

【研究ノート】

バリ州都市部における宗教団体の誕生

嘉 原 優 子*

はじめに

インドネシアにおける宗教人口比は、イスラム教徒が86.9パーセント、カトリック系キリスト教が3.1パーセント、プロテスタント系キリスト教徒が6.5パーセント、ヒンドゥー教徒が1.9パーセント、仏教が1.0パーセントである（1985年統計局調べ）。圧倒的にイスラム教徒が多いということと、ヒンドゥー教徒および仏教徒が少ないということがわかる。いずれもインドネシアにおいては少数派である。しかし、ヒンドゥー教徒と仏教徒では大きな相違点がある。それは、仏教徒が少ないながらもインドネシア全域にほぼまんべんなく居住しているのに対し、ヒンドゥー教徒はその93.1パーセントがバリ島に居住しているのである。数パーセントいる他宗教の信奉者はジャワ島を始め、他地域からバリへとやってきたイスラム教徒や、キリスト教徒、仏教徒である。言い換えれば、バリ人であるということは、ヒンドゥー教徒であるということだ。

バリ島はヌサブニダなどの小島を含めてインドネシアの一州であり、その面積は5561平方キロ、インドネシア全体に占める面積は0.29パーセントに過ぎない。そして、バリ島に住む人々の約95パーセントがヒンドゥー教徒であるが、それでもインドネシア国民の2パーセントに満たない。

* 人文学部講師—宗教人類学

現在、一般の観光リゾート地となった「バリ」のイメージは、昔では「インドネシア」のイメージよりもはるかに多く語られているが、上記で述べたように、バリは宗教的にも地域的にも、インドネシアにあっては一分野一地域に過ぎない少数派なのである。

1950年にバリ島がインドネシア共和国に編成されて以降、バリ人はインドネシア政府の進める国家統一政策に巻き込まれていった。インドネシアは「多様性の統一」をスローガンに、国是として五項目からなる「パンチャシラ」を掲げた。その中でもまず挙げられたのが「唯一神への信仰」であった。政府は唯一神への信仰を条件に、国民の宗教の自由を保障したのである。当初、唯一神を持つ宗教として認知されていたものはイスラム教、カトリック、プロテスタントであり、バリ人のヒンドゥー教には、1952年、種々の土着信仰と共に「その他の宗教」であるとの決定が下された。自らの宗教が異端であると判定されたのである。これはバリ人にとっては大きな驚きであり、耐え難い恥辱でもあった。イスラム教徒たちは、インドネシアにおけるマジョリティを背景にパンチャシラに対立することもあった。イスラムの教義の上に掲げるような国是は容認できないということである。しかし、少数派のバリ人ヒンドゥー教徒たちは、とにかく、いかにこのパンチャシラの要求に応えつつ、自らの宗教の正統性を政府に認めさせるか、努力を重ねていくことになる。ヒンドゥー教の指導的立場にある人々を中心にヒンドゥー教評議会が組織された。教義が整えられ、教義書が作られ、唯一神も創られた。それぞれの村で個々に行われてきた儀礼は簡略化され統一への努力が払われた。そして遂に1965年、バリ人のヒンドゥー教は唯一神への信仰として国の認める宗教となったのである。

近年では、仕事を求めて都市部に移り住む人々も多く、生まれ育った村で行われていた宗教行事などに必ずしも参加できる状況にない。移り住んだ都市では、バリの様々な地域から出てきた人々のみならず、インドネシア全域からバリ島へやってきていた人々が住む新しいタイプの町が形成されている。ここにはヒンドゥー教徒だけでなく、イスラム教徒やキリスト教徒も共

に暮らしており、そのような場所では、地縁的な神格を祀るための寺院もなく、祭礼を行うこともない。企業や役所などに勤める人々には、210日ごとに行われる郷里での祭礼にいちいち戻っている余裕もない。実践宗教としてのバリ・ヒンドゥーは、現在、大きく変容しつつある。

このような現状において自らの宗教的アイデンティティを模索する人々もいる。現在、デンパサールで活動しているヤヤサン・ブンガヨマン・マジャパヒト (Yayasan Pengayoman Majapahit) もその一つである。

ヤヤサン・ブンガヨマン・マジャパイトの歴史

(1) 現在の活動

ヤヤサン・ブンガヨマン・マジャパイト (以下、YASPEMA) は、現在、バリ州デンパサール市に本拠を置く宗教団体である。ヤヤサンとは法人、ブンガヨマンとは加護、マジャパイトは13世紀末から15世紀まで中部ジャワに勢力を誇った王国名であり、インドネシアにあっては栄光の代名詞でもある。会員数は約150名で、地域やカーストを越えて結びついている。家族で入会している場合が多い。それぞれの会員は、自宅において月木土の週3回の祈祷を行う。これにはおよそ半時間から場合によっては1時間近くかけることもある。中にはカマル・スチと彼らが呼ぶ聖なる部屋を屋敷内に設け、そこで祈る会員もいる。それらの決められた日以外でも可能であれば祈りを捧げる。夜だけでなく毎朝祈りを捧げる人もいる。デンパサール市内に聖なる泉を擁する聖所を持ち (かつてはここが集会の場であった。現在は子孫によって守られ許可なく入ることはできない)、デンパサール郊外の現在の最高責任者イ・ニョマン・リラ氏の自宅において毎週水曜日夜に集会を開いている。集会へは、市外や県外からも会員が訪れる。各人がなんらかの供物とともにお布施を持参する。毎回人数は一定ではないが、決して狭くはない指導者宅の1階は、正装をした人々で埋め尽くされる。会員以外に噂を聞きつけた人が訪れることもある。その多くが原因不明の病気に罹っていたり、なんらか

の不幸を抱えている人であるという。指導者の妻は、特別な修行を積んだことではないというが、そういった人々の体に触れマントラを唱え、聖水をかけるなどして「治療」を行う。しかし本人は治療という意識はないし、シャーマンでも呪医でもないと言っている。この治療行為の補佐には高校生の長男が当たっている。YASPEMAの現在の筆頭指導者イ・ニョマン・リラ氏は現在51歳で医師でもある。また彼の義弟がその補佐に当たり、事務的な処理を行っている。

YASPEMAは、その興りにおいてはサンガル・ブンガヨマン（Sanggar Pengayoman）という少数の同志の集まりであった。彼らは瞑想や断食などの禁欲行を集団で実践していた。現在、最高責任者の地位にあるイ・ニョマン・リラ氏はごく初期から参加していたが、彼が中心的立場にあったのではない。YASPEMA開祖ともいべき重要人物が存在する。

（2）開祖R.A.シティ・スタルミについて

かつて中部ジャワからバリへ家族と共に渡ってきた女性ラデン・アユ・シティ・スタルミ（Raden Ayu Siti Sutarmi）は、デンパサールに居を構えた。やがて彼女は弟たちや友人たちと共に禁欲行を実践するようになる。真摯な修行の日々を送っていたある日、スタルミは、全能なる至高神に祝福され天啓を受けた。神は彼女に告げた。「私は私を信じる人々を導くためにお前の身を借りて地上に降りよう。お前は私をその身に受けることができるよう自らの身体と魂を清めなければならない。そのために断食を行い完全なる状態で私の降臨を待つように。」すぐさまスタルミは、神に課せられた条件を満たすべく厳しい断食を決行した。そして1963年3月15日、彼女は突然トランス状態に陥る。この日、全能なる至高神は彼女の身体を借りて信者に初めて語りかけたのである。それ以来、3月15日はYASPEMAの聖なる教えが示された記念日として、“3月15日の降臨日”と呼ばれて現在も毎年信者たちによって祝われている。

1963年3月15日以降、神は夜毎夜毎途絶えることなくトランス状態のスタルミの身体に降臨し、その存在を現し、いかに瞑想を行うべきか信者たちを

導いた。降臨した神は、普通の人間では到底できないような奇跡をスタルミの身体を使って示した。たとえば歩くことすらできなかった重病人をたちどころに治したり、大地から宝剣を引き抜いたり、姿を消したり、人々に特別な力を与えたりなどといったことをである。こういった形での神の導きは1972年まで続けられたが、やがて大きな試練を迎えることとなる。1972年、会員の一人が病気にかかった子供を治療のためにスタルミ師のもとに連れてきた。スタルミ師に降臨した神は、子供を聖なる地下室に導き入れ、治療のためにそこにとどまるよう告げた。子供の親は連れ帰ることを望んだが、治療中であるとしてその望みは聞き入れられなかった。病気の子供を心配したあまりに、親は子供が誘拐されたたと警察に訴えたのである。スタルミ師の行為は、世間の人々の誹謗中傷を浴びることとなった。この事件をきっかけに神が信者たちを導く方法に大きな変化がおこった。そしてYASPEMAは次の段階を迎える。

(3) 聖歌と聖像の降臨期

1972年の事件を境に、修行に参加していた多くの信者がYASPEMAを去っていった。信者数が減少した後、神の化身は降臨する度に聖歌 (syair) の形で、あるいは聖像 (arca) の形で天啓を示し始めるようになった。それらの聖像は、人類にとってきわめて有益なものであったけれども、この時点ではまだその有益性は理解されていなかった。スタルミ師の身体に降臨した神は、17篇の聖歌と117体の聖像を信者に授けた。このような活動を地道に続けるうちに、去っていった人々が再び戻り始め、救いを求めて新しく信者となる人々の数も増えていった。神の降臨と神への信者たちの献身は、1993年11月29日にスタルミ師がこの世を去るまでずっと続けられた。この時期、信者たちは「沈思黙考する人々」と呼ばれていた。というのも、「修業する」ということの意味内容が、「沈思黙考をする」という意味に変わっていったからである。

この時期に授けられた聖歌は、現在もYASPEMAの修行に必要な要素となっている。週1回の集会では、カセットテープから流れる明るいオル

ガンの調べにのって聖歌が流れる。音楽が流れている間、人々は座って目を閉じ、手を合わせる。誰も一言も発さない。聖歌の録音されたカセット・テープを自宅に準備して、自宅での修行に用いる信者も多い。また、聖像の多くは最高責任者であるニョマン氏の自宅の敷地内と屋敷内に設けられた聖なる部屋に置かれており、信仰の対象となっている。

（4）YASPEMAの誕生

医師でもあるイ・ニョマン・リラ氏は、妻と共に、晩年病いの床についたスタルミ師の看病に当たっていた。ある日、病床のスタルミ師に神が降臨し、ニョマン氏と彼の妻に次のように問い掛けた。「汝はサンガル・ブンガヨマンの教えを遵守し、後継者となるか？」神はそれを3回繰り返したという。

スタルミ師の死後、ニョマン氏が集団のまとめ役となったが、神と直接交渉をする能力はニョマン氏夫妻を含め、信者の誰も持っていなかった。人々の信仰の拠り所となった神の言葉や神のあらゆる奇跡に触れることができなくなったのである。信者たちの間に動揺が広がり、次第に修行に支障が出るようになっていった。ニョマン氏や中心メンバーたちは、もしブンガヨマンの聖なる尊い教えを十分にかつ正しく理解しているのであれば、たとえ神の奇跡に直接触れることができなくとも迷いは生じないはずであると考えた。そして、ブンガヨマンの教えを維持し、より良く理解するために、私的なサークルにすぎないサンガル・ブンガヨマンを法人化し、集団としてのアイデンティティを確立しようとしたのである。ニョマン氏夫妻の努力と主たるメンバーの献身的な協力によって法人化の手続きは進められ、スタルミ師の死後3年を経た1996年11月29日にサンガル・ブンガヨマンは晴れてヤヤサン・ブンガヨマン・マジャバイトYASPEMAとして再出発することになったのである。

法人化とそれに伴うブンガヨマンの教えの体系化によって、信者たちは神から下された宝物、聖歌、聖像、それ以外のあらゆる事柄について十分に学び深く理解し、それを実践し守ることができるようになったという。そして、それまで明らかにされていなかった数々の宝物がいかにより人類にとって有益な

ものであるかを理解し、それらを人類を救うために使うことができるようになったのである。たとえばある聖像は世界を滅ぼす大地震を防ぐために下されたという。次に彼らは YASPEMA の教義書作成に着手する。

(5) 教義の整理

スタルミ師が信者を率いていた時期に、神によって下された下された教義は次の三つの様相からなる。

- 1：霊的なものにかかわること
- 2：知識にかかわること
- 3：組織にかかわること

いかに霊的なものに関わるかということについては、基準となるものさしはない。すべては神の現れに対する瞑想者たちの懸命なる奉仕にかかっている。したがって、その評価はすべて神に委ねられている。知識に関わることの内容は、主として社会を構成する原則についての理解である。YASPEMA の信者のほとんどすべてがヒンドゥー教徒であると同時にインドネシア国民でもある。したがって YASPEMA の聖なる教えを理解する際にヒンドゥー教の教えに対立したり、インドネシア国是である建国五原則パンチャシラから逸脱することは認められない。また、当然のこととして新しい宗教を作ったりしてはならない。そして組織は、悟りの境地を獲得するための修行を助けるものとして機能しなければならない。

これらの三様相をふまえた上で、YASPEMA はまず修行の実践方法入門を編集し、その中で「神への尊い献身を伴う沈思黙考によって、悟りを開くことができる」という精神的指標を示した。この指標に基づき、誰もが YASPEMA の教えを学ぶことができるようにと指導書を作成した。聖なる教えを学び正しく理解することによって、信者は迷いから脱却し、聖なる教えを実践し遵守することができるようになったのである。

すでに成文化された YASPEMA の教義には以下のものがあり、現在も作成が続けられている。

- 1：生きる方法としてのブンガヨマンの聖なる教え

- 2: 聖なる教えの珠玉の言葉
- 3: プンガヨマンのシャイールの意味
- 4: プンガヨマン・マジャパイトの修行方法
- 5: パンチャ・ダルマ (Panca Dharma)
- 6: 尊い目的である真の人間
- 7: 自己の滅却
- 8: 真の聖像
- 9: パンチャ・ダルマによる魂の導き
- 10: プンガヨマンの聖なる教えを通じて到達するモクサ (Moksa)
- 11: カルマ (Karma)

むすびにかえて

YASPEMAの変遷は、1950年代のバリにおけるヒンドゥー教認知運動やそれに続くバリ・ヒンドゥーの体系化の動きと無関係ではないと思われる。スタルミ師に初めて神が降臨した1963年前後には、その動きが特に活発であった時期と重なっている。ヒンドゥー教徒であるということはバリ人のアイデンティティの根幹である。そして、インドネシアに編入されたことによって、インドネシア国民でもあらうとするバリ人のアイデンティティは大きな変換を迫られることになったと考えられる。

R. A. シティ・スタルミ師のライフヒストリー、修行形態の変遷、教義についてなど、調査すべき点は多く残されている。ジャワやスマトラに無数に存在するクバティナン (kebatinan) というジャワ的神秘主義との比較も、今後視野に入れて研究を進めるべきであろう。

(2000年10月2日 受理)